

2010年4月下旬、約15名のツアーは上海虹橋空港から春秋航空8871便に乗り、2時間後、湖南省の張家界空港に降り立った。

春秋航空といえば最近茨城空港に乗り入れた格安航空会社として日本でも有名になったが、私は大連に住んでいた時、機会があればこの春秋航空を利用した。上海に本社を置く中国初の民営格安航空会社である。利用する理由は3つある。1つは会社名。春秋と言う言葉は勿論、春と秋の季節を表わすが、中国の昔の時代の名称であり、史記の「春秋に富む」など歴史書によく使われる言葉で深みが有りとても好きなのである。会社設立は2004年5月である。何でもネーミングは大切である。

2つ目は航空運賃が安いことである。中国の諺に「1分銭、1分貨」という諺があるが、諺通りに、搭乗するとミネラルウォーターをペットボトルごと1本だけくれるのである。座席も少々窮屈だが2～3時間の距離はこれで充分である。

3つ目はスチュワーデス(今はなぜかフライトアテンダントと言うようだが)が首に巻いている緑と黄と二色のネックチーフがとても上品で好きなのである。これを巻くとどのスチュワーデスも美人に見える程である。機内で販売しているので乗った時は日本への土産として購入した。だいぶ横道にそれだが春秋航空についていつか書いておきたいと思っていたのでお許しいただきたい。

さて今回は張家界市と鳳凰という美しい名前の町の二ヶ所の旅行記であるが、旅の日程に沿って鳳凰古城からはじめることにする。その前に湖南省全体を見てみたい。私は湖南省といえばこれまで洞庭湖と数々の漢詩に謳われた岳陽楼しか知らず一度も行ったことがなかった。折角今回チャンスを与えられたのでいろんな知識を仕入れた。少し誌面を割かせていただきたい。

湖南の「湖」であるが、先述した洞庭湖という中国で三番目に大きな湖(2432km²もあって琵琶湖の3.6倍の広さがある)をいい、その南にあるのでこの名がついた。省内の一番大きな河川は「湘江」で、そこから湖南省の略称は「湘」となっている。この湘江流域には芙蓉(荷花)がたくさん植えられているようで、唐詩の中にも「秋風万里芙蓉国」と謳われ、また毛沢東の詩にある「芙蓉国尽朝暉」(朝暉は朝の日差しのこと)という句が良く知られているらしい。そうしたことから同省は別名を「芙蓉国」というようだ。いかにも美しい情景が眼に浮んで来そうである。どうりで空港の名称は「張家界荷花機場」となっていた。建物の外観も芙蓉の花が咲いているような形であった。

省都は「長沙市」だがあまりなじみのない都市で私も知らなかった。「沙」は砂のことだが湖南地方は中国有数の穀倉地帯であるから長い砂丘などないであろうに。あまりじっくりこない名前といえば叱られそうだが。

湖南省といえば、建国時に多くの人物を排出している。まず毛沢東そして胡耀邦、華国峰、劉少奇等々。栄光の省とでもいえようか。ちょうど明治維新の薩摩藩と長州藩のようなものだ。また中国国内を旅行すればよく話に聞いたり、銅像も立っている雷鋒も湖南の人だ。共産主義戦士として1962年に22才の若さで国家のために殉じた人で、子供でも知っている。共産党の精神的な柱となっているようだ。それではそろそろ本題に戻るとしよう。

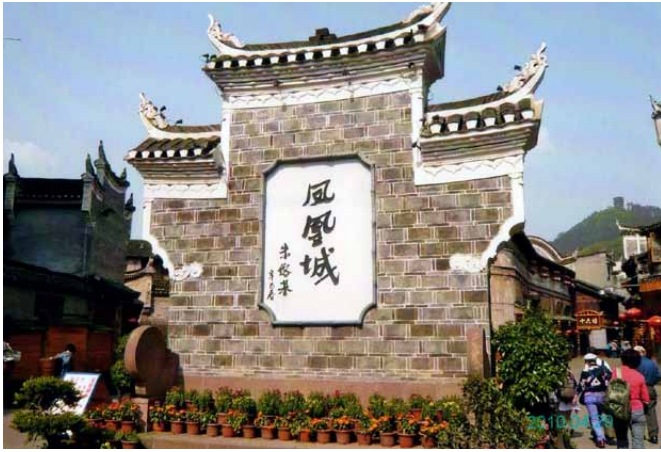
1. 鳳凰古城

張家界に到着した翌朝、ホテル前からバスに乗り、鳳凰をめざした。南西方向に約300km走るといふ。鳳凰という町は勿論聞いたこともないが、「中国で一番綺麗な古城(町)」というのだ。私の厚いガイドブックを調べたが出ていない。想像をふくらませてもイメージがわからない。

バスが走り出してすぐ左手に迫力のある岩山が目飛び込んで来た。拳骨を巨大にしたような山容で、高さは1517mと結構高くそびえ、周囲に高い山がないのでとても印象的である。皆その山を眺めると女性のガイドの李さんが、「左の山は天門山といひます。とても素晴らしい山で1300mくらいの所に天門洞という大きな空洞が空いています。小型の飛行機が通りぬけられるほど大きいものです。鳳凰は半日あれば充分なので、明日、天門山観光を取り入れるべきです」と強く主張し始めたのである。

あまりにしつこく言うのでツアーの団長がどうしたものかとオロオロする始末。結局予定を途中で変更すべきでないという正論が採用され、車窓から眺めるだけとなった。彼女にとってはそこも案内するとバックマージンが増えるからであろう。ところで李白に「望天門山」という詩があるが、これは安徽省の長江沿いにある山で別である。安徽省の天門山は見たことはないが、この張家界の天門山の方が素晴らしいのではないかと思う。

バスは舗装された道であるのだが常にガタゴト揺れながら走っている。舗装が良くないのか、バスの



鳳凰古城の入口



銀製品などを売っているホテル近くの露店

スプリングが悪いのかどうか分からないが、中国の地方の一般道は概して快適ではない。

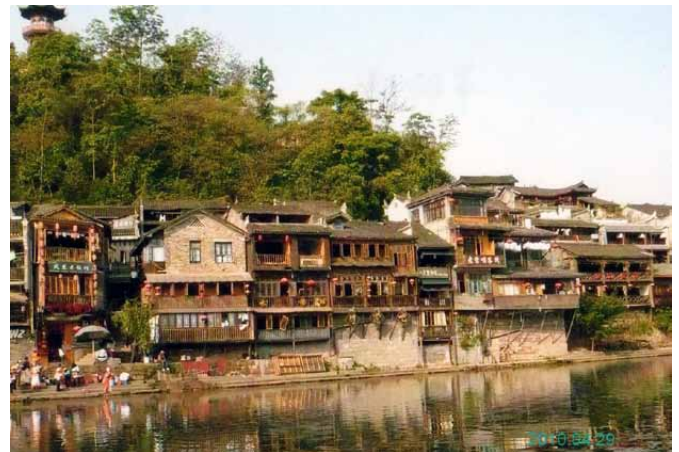
3時間余り走り吉首という街に入る。そろそろ着くのかなと思っていると、ここで昼食をとってまだ1時間半も走るといふ。上り坂や下り坂が延々と続き、天門山が見えなくなると印象に残る景色も殆どなく、こんな山奥に果して「中国で一番綺麗な古城があるのか」と心配になってくる。結局午後2時半に鳳凰古城の入口近くに着いた。そこからほどなく「江天旅遊度假村」ホテルに着く。3階建てで屋根瓦がのっている。ところどころに^{うだつ}卯建の白壁で仕切られているホテルで周囲の環境によく適合している。道路の両側もいかにも中国らしい建物の商店が軒を並べ、地面に土産物や果物を置いて売っている人もあり、とても活気がある。チェックインしたあと夕方まで自由行動となった。

鳳凰古城の入口であり象徴でもある「虹橋」がホテルのすぐ近くにあり皆まずこの橋を写真におさめる。この橋の外観はといえば、立派な屋根がついており、その両端はピンと反った独特の形をしている。虹橋と名がついているが、虹のような色でなく橋全体が紺色とグレーを交ぜ合わせたような深みのある色で覆われ、午後の日差しに映えて美しさを増している。橋の通路の両側には商店がズラリと並んでいる。橋の形だけでもめずらしいのに、橋の中にはお店がたくさんあるなんて、何となく嬉しくなるではないか。

見ると近くに銀山でもあるのか銀製品の店が多く、また水牛の角で作った製品の店も多い。女性の参加者は、目が輝きを増し、早速品物を手にとり、首や手首につけたりしている。これまでいろいろな橋を見てきたが、屋根つきの橋は見たことがなく、この橋を見ただけでも山道を4～5時間もかけて来た



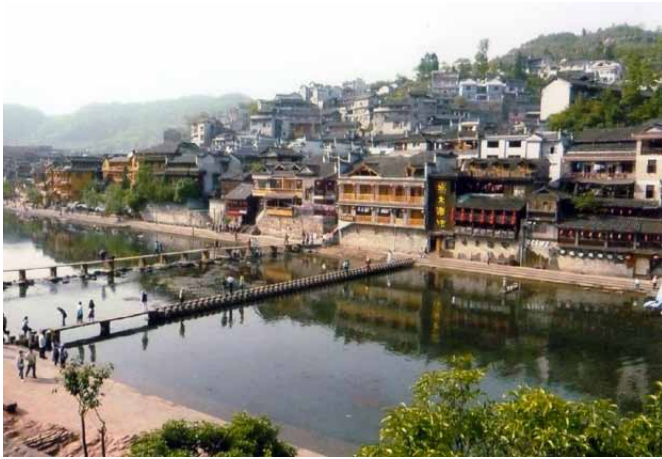
屋根つきの橋で知られた虹橋



吊脚樓の景観

甲斐があったと思った。以前ジェームズ・ウォラーの「マディソン郡の橋」という本を読んだが、本の中の写真を見ると屋根つきの橋であった。アイオワ州にあるらしいが雨の多いところなのであろうか。

橋を通り抜け、右手に石段を下りると川沿いに城壁のように続く建造物がある。上にのぼると景色がとてもよい。そこから川の両側の建物を見る。多くは旅館と土産物店である。これらの建物は「吊脚楼」と言って丸太を川に斜めに突き出し、建物の面積の半分近くが川の上にせり出すように建てられていて



沱江と跳岩の遠望

独特の景観を見せている。これもこの古城の名物だとガイドが教えてくれる。何のためにいつ頃からできたのであろうか。大雨が続き鉄砲水のように川が増水すれば、ひとたまりもないと思うが、それも杞憂なのであろうか。

そこから作家の「沈從文故居」に向う。彼が書いた「湘行書簡」がこの古城を一躍有名にしたという。1934年初頭、彼は湖南省の北部にある常德市から舟に乗り故郷の鳳凰に帰る旅をした。旅の途中で見聞したものを家で待っている新妻に手紙で書き送り続けたという。のちにこの手紙をもとに本にまとめたのが「湘行書簡」である。私も土産物店でこの本を購入して本箱に飾ってある。彼の住居は今は観光名所となっているが、この他にも「楊家祠堂」、「熊希齡故居」、「古城博物館」は一見の価値がある。「天后宮」「天王廟」「万寿宮」など由緒ある寺院も多い。小さな町だが、歴史がいっぱい詰まっている。また、この町の路地は殆ど石畳となっていて、町の雰囲気づくりに役立っている。中国の小京都といった風情である。

さて虹橋の下を流れる川だが、町を二分するように中心を流れている。沱江(トゥオジャン)という川だ。川幅は広いところで70～80mはあるだろうか。ゆったりとした流れの中に飛び石状に「跳岩」と呼ばれる石が設置されており対岸まで行けるようになっている。渡ってみたが岩のまわりの水流は速く少しこわい思いをした。跳岩の少し下流に船着場があり20人乗りくらいの船がつないである。2グループに分かれ乗船した。兩岸の吊脚楼や遠くの山々を見ながら船は虹橋の下をくぐってゆく。そのうち川岸に一艘の船が見え、舳先にカラフルな民族衣装を着た若い女性が立っている。ガイドが少数民族の苗族の

女性のようなと言っていた。そして「近づいた時全員で拍手すると歌を歌ってくれます」と言うので皆拍手した。果して綺麗な高い声が山々にこだまするように聞こえてきた。最後に「ヨーホイ」と締めくくった。ガイドが「これは歌を返してください」という意味だと言うのでツアーの中の歌の上手な人が歌いはじめた。何という優雅な舟遊びであろう。そうこうするうちに「万寿宮」というお寺の下の船着場に到着し下船した。皆しばらく幸せな余韻にひたっていた。

午後の時間はあっという間に終り、買物やまだ観光できなかった場所は翌日とし、ホテルに戻り夕食をとった。夕食後夜景がとても美しいとのことなので皆また外出し川沿いの道を歩く。遠くの橋も近くの橋も吊脚楼もライトアップされ、真黒な川面にそれらが映し出される様子はまるで夢の中にいるようだ。この古城を人々は「夢里的故郷」と言うのでガイドブックにある。

ここまで書けば「中国で一番綺麗な古城」といわれるのを納得されたであろうか。ただ美しいというのではなく、シンボルの虹橋、川に突き出ている吊脚楼の奇観、防火と美を融合した卯建の数々など他所で殆ど見られない建造物。歴史と石畳に包まれた古城。優雅な川下りと少数民族とのハーモニー。これらにより最大限の形容詞は、この古城にふさわしいのではないかと。ガイドが世界遺産を目ざしていると言っていたが、何れの日か実現するかも知れないと思った。

翌日は、改めてゆったり観光し昼食後古城を後にした。もう二度と来られないのではと一抹の寂しさを覚えた。来た道に戻っているのだが車窓の風景も違って見える。ちょうど田植の時期であちこちで稲を植えている。一昔前の日本の農村風景のようななつかしさを感ずる。帰り道でうれしかったのは、「芙蓉鎮」という町を通ったことだ。私はこの映画はまだ見ていないが、「ここでロケしたんだ」と思い、いつの日か必ずこの映画を見てみよう、風景を目に焼きつけた。映画を製作する前は王村鎮という名だったそうだが、この映画により村の名を改めたと説明があった。1987年の作品だそうだ。芙蓉国の芙蓉鎮。昨日のバスの中では早く到着しないかとばかり思っていたのに、帰りのバスでは全く違った気持ちになった自分がいた。

(次月号に続く)